

第21回 臨時休業の間に考えたこと

～ 2年生国語の課題から ～

新型コロナウイルスの感染拡大が徐々に収まりつつあった5月下旬に、2年生を対象にした国語の課題「今回のコロナウイルスの状況について思うこと」が出されました。学校の臨時休業が終わる5月末日を締切りとして提出された生徒たちの作文の中から、一部抜粋してご紹介します。生徒たちは、臨時休業が続く中、突然の状況に戸惑いながらも、それぞれできることに取り組み、多くのことに思い巡らせながらたくましく成長している様子が伺えます。

1) K. T.

(略)

感染症が流行するのと同時に世界中に蔓延するもうひとつの脅威、それは差別だと思う。いつ生まれたのかも分からないウイルスに、誰が感染したくてしたと言うのか。ウイルスの存在が明るみになるまでに感染した人々はどれほど恐ろしい経験をしたか、私には分からない。ほとんどの人間がそうだろう。それなのに、どうして彼らを責めることが出来るのだろう。ウイルスの流行の引き金になってしまったのには間違いないし、そこには確かに責任が生じるはずだ。しかし正直に言うと、私は剥き出しの悪意など見たくはなかった。ニュースで、医療関係者の子供が差別されている現状を知った。差別される人の気持ちも、差別する人の気持ちも、とてもよくわかる。自分の身を守るため、人を傷つける。人を守るため、自分が傷つけられる。非常に辛い現実だと思う。今、世界中で人々が戦っている。ある人はウイルスと、ある人は滞った経済と、ある人は自宅警備員と化した子供たちと、ある人は溜まっていく課題と、ある人は出掛けたいという欲求と。敵の強さはそれぞれだが、共通して言えることは、絶対に負けてはならないということだ。そして、私達が一番知っておくべきなのは、人々が戦う理由だ。誰のために、何のために戦っているのか。それを考えたら、差別することが如何に無駄なことかが分かるだろう。

私達はここまでで、何を学べたろう。私個人としては、ウイルスに関しての知識を経験はもちろん得ることが出来て、医療従事者や流通関係者の重要性を知ることも出来た。しかし、それ以外に何があるかと考えても、正直なところ何も思い浮かばない。けれども私は、それでいいのだと思う。何故なら、学校が始まって、いつも通りの生活に戻ってきたときに何かに気付くはずだからだ。現在は異常な状況の中で、頭が混乱している自覚がある。落ち着いて考えられるようになったとき、きっと後悔することがあるだろう。もっと考えて行動すればよかったと。それでも今、出来ることはしてきたのだ。

(略)

先の見えない戦いだからこそ、目的や目標をはっきりさせることが重要で、それがみんなを救うことに繋がるはず。だから今は頑張ろう。失ったよりも多く、私達は何かを得なければいけないのだから。

2) S. S.

(略)

コロナウイルスによる影響で私たちが失ったものは数えきれないが、手に入れたものもたくさんあるはずだ。まず、私たちはこの短期間で、面と向かわずとも学習を進めることが可能だと知れた。

先生方が準備してくださるおかげでスマホ一台で予習から復習までしっかりとできる環境を手に入れたのである。アプリを使えば友達と勉強する様子を映しあってあたかも授業を受けているような感覚になれる。コロナ問題が終息してからも、例えばインフルエンザで学級閉鎖になってしまったクラスで同じような対応をしたりできるかもしれない。

(略)

もう一つは、人と直接会うことの大切さに気づけたことである。先日、私は誕生日を迎えた友人とオンラインでパーティーをした。それぞれがコンビニでケーキを持ち寄り、歌を歌って、プレゼントは宅配で届ける。お互いの顔を見ることができ、声もしっかり届く。しかし、それでも何かが足りないと感じてしまうのだ。同じ空間で、同じ時間、同じ気持ちを共有している感覚がない。

「会ったつもり」になれても実際に私が会えたのは友人の顔を映すスマホの画面である。もしかするとどんなに世の中の技術が進歩的になっても実際に会うことでしか「会う」という感覚は味わえないのかもしれない。

(略)

3) M. T.

今回のコロナウイルスの流行で、私が特に実感しているのは、メディアリテラシーの大切さである。そもそもメディアリテラシーとは、メディアから得た情報から本当に正しい情報を自分で判断し、理解する能力のことだと認識している。この能力がない人々により社会が混乱した事態を二つ挙げよう。一つ目はトイレットペーパー品薄騒動だ。ツイッターで流れた根拠のない情報によって多くの人々がドラッグストアに殺到し、トイレットペーパーがどんどんなくなっていった。人々は感染への恐怖から、情報に踊らされていたのだ。(略)二つ目は木村花さんの自殺だ。これはテラスハウスに出演していた花さんを一部の人が SNS で誹謗中傷し、精神的に追いつめられたことにより引き起こされた。(略)番組はリアリティショーで、作られた日常。しかも一部を切り取って放送している。それをわからないで彼女の人格を勝手に解釈し、傷つけた、その放送されているものをすべてだと捉えてしまったのだ。これも、メディアリテラシーが無いゆえに起こってしまった。人が亡くなってしまった最悪の事例だ。このようにメディアリテラシーがないと、とんでもないことを引き起こしてしまう場合がある。今回のように感染への恐怖があればなおさら人は行動に出してしまう。テレビやインターネットを見る機会も増え、取り入れる情報も今までより増えた、そこで、何が本当に正しいのか、氾濫する情報の中で、自力で選べる力が必要になってくる。もう一度、自分のメディアリテラシーを育むべく情報と向き合うことが、このコロナウイルスを乗り切る上で大切になるのではないか。

4) Y. Y.

(略)

私はこの事態のことでこれまで話していたこと以上に考えたことがあった。それは、副産物かのように出てくる差別だ。東日本大震災の時と今回の新型コロナウイルスでは、被害のケースや規模などそもそも本質的に違うのにもかかわらず、どちらでも差別の問題が起きているのだ。震災の時には、津波の被害にあった、特に原発事故のあった町周辺の出身の人たちが他県に被害の影響で引っ越しそこで学校単位あるいは地域単位で差別があった。その内容の例としては放射能が全国的に危険なものと報道されてから、引っ越してきた子供に対し、周りが「放射能が付くから近寄

るな」というような発言をしたりしたという。実際はもっとひどい言動、扱いもあったという。そして今回、コロナの発現点といわれている武漢市の市民の人々は、震災の例と似通ったことをされたりしているとメディアでも述べられていた。もちろん、全ての人がこのような扱いをされたりしている訳ではない。けれども、このような差別じみた行為を私たち人間は取ってしまっているのだ。

(略)

「子供らを被害者にも加害者にもせずにこの街で暮らすためまず何をすべきだろう」

(略)

私たちは言葉や行動ひとつで被害者にも加害者にもなってしまう。自分で考えて選択ができる私たち人間ならば、自らが加害者になるような選択をするのではなくお互いに手を取り合い、寄り添いあい、この状況の原因は人ではない、そんな風に考えて行動ができるはずだと私は思います。だから、今こそ手を取り合って協力してみんなで立ち向かい、この状況を乗り越えていくべきであり、そうして今を過ごせて行けたらと思う。

5) K. H.

私がこの休校期間中に最も関心をもったことは自学をすることについてだ。(略)まずは学校の先生に教わらずに新しい範囲を勉強したことだ。この生活の始めは初めて目にする二年生の学習範囲を理解することが難しく課題にも追われていた。勉強の予定を組み実行することはとても苦労した。しかし、メリットもあった。それは自分のペースで勉強できたことだ。教科書を隅々までじっくりと読み込むことができ、自分の理解した部分理解していない部分に合わせて進めていけたことはとても良かった。苦手な教科も解説動画を探し、普段よりも時間をかけることで理解することができ、授業についていけなかった時より気持ちに余裕があった。

次に勉強の予定を自分で立てなければいけなかったことだ。(略)細かな時間を活かすことは慣れていたが多くの時間を使うことには慣れていなかった。(略)そこで私はこの問題を二つの方法で解決した。一つ目は部活の仲間と時間を決め zoom を繋ぎ、一緒に勉強するようにした。友達に見られている緊張感と一人ではないことにより、集中して勉強できるようになった。二つ目は勉強時間を記録するアプリを使ったことだ。(略)勉強時間が数値化されてグラフになるためモチベーションの向上にもつながった。(略)私は勉強手段、長い時間の使い方などこの三ヶ月間で学ぶことについてたくさん考えた。それにより、私の自学自習のスタイルは以前よりも向上した。二年生の学校生活の約半分が失われ、行事やイベントも中止になってしまったが、自分を成長させることができたのはこの期間のおかげだったと思う。

6) Y. T.

(略)

この二カ月で、私の気持ちに変化があった。その変化の中で一番大きいことは、あるものの中で何かできないか考えるようになったことだ(略)以前なら、早く元の生活に戻ってほしいと強く願う気持ちや、外に遊びに行けなくてつまらないという考えが大きかった。しかし、今は家の中で楽しめる方法はないかと考えるようになった。その結果、様々なことが制限されている今でも、日々楽しさを感じている。あれがない、できないと後ろ向きに考えるのではなく、これならできると

前向きに考えることで、コロナウイルスとの長期戦を過ごすことができている。これは私にとって、大きな成長であり、これからの生活にも生きる大事な考えだと思った。

また、周りのものに感謝の気持ちをより持つことができたのも大きな変化の一つである。家にいて手伝いをしたり、家族といる時間がいつもより長くなったりしたことで、家族への感謝が大きくなった。父は一日中在宅勤務を頑張ってくれるし、母は美味しい料理を三食作ってくれるし、姉は楽しい話や勉強のアドバイスをくれる。いつも私が学習に集中して取り組めるのは、当たり前ではないのだと改めて感じた。感謝が芽生えたのは家の中に対してだけでない。こんな状況でも食べ物はお店に売っていて、欲しいものもインターネットで簡単に手に入る。学習面でも、課題や動画、質問フォームなど様々な工夫をしてくださる先生たちのおかげで私は学習を続けられる。最初は、宿題が多くて大変だと思っていたが、それ以上に先生方が時間をかけて学習環境を整えてくださるのだと思うと、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。最前線で働く数えきれないほどの人々の力があって今の私が成り立っている。このことは、緊急事態の今においても通常の生活においてもそうである。当たり前のように思っていた生活は当たり前でない、感謝を忘れてはいけないということはこの生活で実感した。

自粛生活によって学んだことは他にも多くある。正しい手の洗い方や消毒の仕方、人との距離の取り方など、新たな生活様式によって、私の中での感染症予防の意識が高まった。たくさんある時間の中で自分の将来について見つめなおす機会も増えた。自分一人で学習に取り組むことによって主体的に、計画的に、継続して取り組む力が付いた。これらのことは、この生活でしか気が付かなかったことかもしれない。私は、人類が初めて経験するようなこの生活から、多くのことを学んだ。人間としてさらにパワーアップすることができた期間だと思う。先が見えなくてつらい生活ではあるが、今、この経験ができたことは、コロナウイルスが終息した後も必ず役に立つはずである。この経験を忘れずに、これからも日々感謝の気持ちを持ちながら一日一日を大切に過ごしていきたい。

7) M. T.

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐための自宅学習期間、私はネットにて提示される課題をこなすのに四苦八苦していた。そんな不慣れな方法で勉強する合間の楽しみに、以前友人に勧められたゲームを始めてみた。進行状況がリアルタイムで共有されるため、国外国内問わず色んなプレイヤーとすれ違い、話して、仲良くなれるそのゲームは、会話の多くが英語で行われるため勉強にもなった。そんな中偶然出会った一人のプレイヤーと私は仲良くなった。

偶然時間が合えば、性別も年齢も知らないけれど、簡単な英語で飼っている猫の話や日本について知っていることなどを話してくれて、私はそれに相槌を打った。しかしある時、その人は私に日本の状況について聞いてきた。学生はオンラインで授業を行ったりネットにて提示される課題をこなしたり、仕事は家からネットを使って行うリモートワークなるもので行われている、と辞書などをつかいつつ説明をした。するとその人は、自分の国ではオンライン授業は行われていないことをおしえてくれた。その理由は、ネット環境が家によっては整っていないかららしい。その国では未だ貧富の差は深く、誰かが不利にならないように一部の人間だけしか参加できないようなオンライン授業などは行えないのだ。と丁寧に説明してくれた。

急に聞かれたことや内容もあって、私はなんと返すべきなのか咄嗟に思いつくことができなかった。その人が突然私に話を振ってきた意図も未だ分からない。私が世界的に見て恵まれた日本人であることにありがたく思うべきだと伝えなくてはなるまいとおもったからなのか、たまたま

世界中で話題になっているからなのか。

しかしその話は私に考える機会を与えてくれた。私が持っている視点だけでは簡単には見えてこなかった話を、遠い国に暮らすその人と話すことで新たな視点で見ることができた。この機会がなければ外国の学習状況について想像しようとは思わなかった。もちろん、登校ができなくなったのに勉強ができる私の今の環境には感謝をしなくてはならないということも感じている。しかしそのうえで、私にくれた新しい視点を、新型コロナウイルスについての話だけでなく色々な問題について考えるときに活かしたいと思った。

(略)